

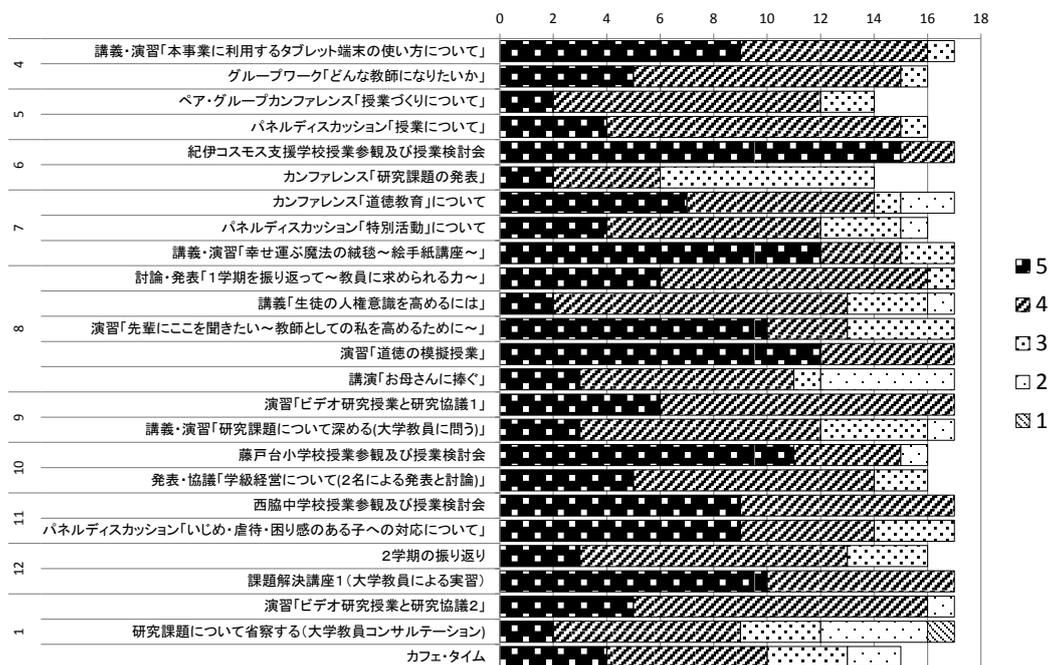
# Ⅲ 成果と課題

# 1 初任者アンケート調査集計及び考察

和歌山大学教育学部 教授 片岡 啓

研修の各項目に関するアンケートは、以下のような問いである。「本研修で行った下記の項目は、教員として成長するためにそれぞれの程度役立ったと思うか。5：大変役立った、4：少し役立った、3：どちらともいえない、2：あまり役立たなかった、1：ほとんど役立たなかった。」

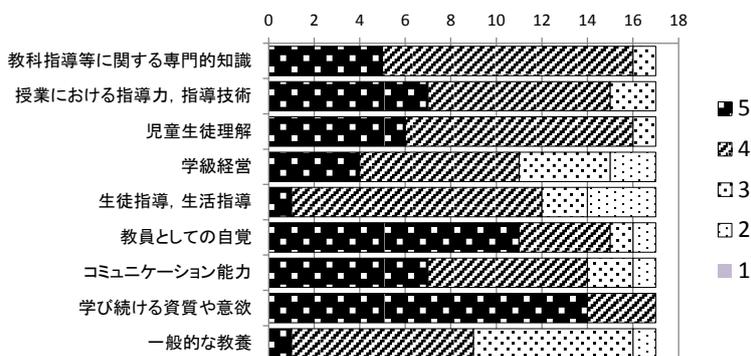
結果は次の図のようになった。



小，中，特別支援学校各1回実施した「授業参観・授業検討会」がいずれも高いのは、授業をじかに見て初任者同士が検討の場を持つ方法が、授業力育成という中心的な目標から見て効果的だったといえる。それに比して、各初任者が実践を持ち寄る「ビデオ授業研究」は、平均的な反応であった。「生の」授業を見て様々なことを考えつのに比べて、発表者の問題意識に沿った発表を聞き、ビデオを見て検討の場を持つことは初任者中心の活動としては難しい面がある

のかもしれない。大学教員の関わりを含め、今後の課題である。

「これまでの研修を通して、どれほど成長したと思いますか。」の問いには右図のような結果であった。



## 2連携・協働の意味を問い直す

和歌山県教育委員会学校教育局長 岸田 正幸

教員養成や現職研修に関わる大学と教育委員会の連携・協働の必要性については、繰り返し求められてきたが、やや理念先行の感は否めず、その具現化については、まだまだ不十分な状況にある。しかし、平成24年8月中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」、或いは、これを受けての協力者会議の報告書以降、この連携・協働の実質的な意味が問い直され始めている。

教員養成は大学、現職研修は教育委員会といった既定の役割分担から脱して、教員として生涯にわたる職能成長をどう支えていくのかという考えに立ち、従来は相手側のマターとして踏み込まずにきたところまで入り込んで、というより、協力して、教員を育てていく必要に迫られている。

和歌山大学教育学部と和歌山県教育委員会は、これまでもジョイントカレッジ等、こうした考え方に基づく実質的な連携・協働を行ってはきたが、今回の初任者研修高度化モデル事業は、これまでの取組をさらに進めた他に類を見ない先進的な試みと考えている。

なぜなら、大学側からすれば、「なぜ、初任者研修を大学がやらなければならないのか」、教育委員会側からすれば、「なぜ、初任者研修を大学にやってもらう必要があるのか」というそれぞれが潜在的に持つ問いかけに向き合わなければならないし、同時に両者にとっての意義を見つけなければならないからである。

もちろん和歌山大学にあっては、後の教職大学院の設置をにらんで、実習協力校との関係性の実際を探ったり、理論と実践の往還という考え方にに基づく現職教員の育成を試行的に行ったりといった現実的なねらいを見いだすことができる。また、和歌山県教育委員会にとっても、大学教員の持つ専門性を継続的に学校現場に取り入れることにより、現職研修の充実と同僚性に基づくアカデミックな学びの文化を再構築することができるし、学び続ける教師を育てるための初任者研修プログラムを開発していくといった現実的な意味づけをすることも可能である。

しかし私はそれ以上に、和歌山という一地方における教員養成や現職教員の職能成長を大学と教育委員会が一緒になって育て、支えるいう意味で、このモデル事業の果たす役割は大きいと考えている。

今から15年ほど前、和歌山県内で連携型中高一貫教育が始まった時、誰もがその具体的な教育の姿が見えないまま、ただ中高一貫教育という新しい制度がここで始まるという事実を前に、中高それぞれの関係者が1つの席に着いたことがあった。そして、その時私は、県教委の担当者として同じ席に座り、議論に加わっていた。もちろん、理念としての中高一貫教育や中高の連携について、否定する者は誰もいなかった。しかし、中学校関係者は中学校教育に対して責任を持ち、高校関係者は高校教育に対して責任を持つけれども、この地域で育つ子どもたちの6年間、つまり6年間の中等教育を系統的・継続的に捉え、両者が等しく責任を持って6年間を育てるという、そうした俯瞰的な視点に立った当事者意識という点では、まだまだ不十分な状況であったように思う。

そうした意味で、中学校教育にあたる養成段階と高校教育にあたる現職研修段階のジョイント的期間である初任者研修を大学と教育委員会が協力して行うことは、教職生活の全体を通じた教員の資質

能力向上方策について、両者が責任を自覚しているという点で、今問われている連携・協働の実質的な意味が担保されていると考えるのである。

18名の初任者たちは、自らの実践を振り返り、考え、そして気づくということを繰り返し繰り返し行い、予想以上に成長した姿を見せてくれた。学び続ける教師となることの大切さを基礎的な資質として徹底的にたたき込まれた18名の初任者たちが、5年後、10年後にどのような変容を遂げるか、楽しみでもあり、また、責任も感じている。

### 3 小学校の校内カンファレンスの成果と課題

プロジェクト教員（小学校担当）

辻 民 子

#### 1 校内カンファレンスに臨んで

私が担当したのは、小学校4校8名である。次の2つの目標を軸に、1年間の校内カンファレンスを行った。

- ① 授業力を育てる
- ② それぞれの学級の子ども（個）の育ちを見続ける

目標を達成するための手だてとして、授業記録をもとに、教材について、教師の出番、子どもの反応（発言）等の分析を継続した。

また、その記録やチェックリストを通して、初任者自身が自分の授業を振り返り、次のめあてを立てられるようにした。その際には、私自身の実践を含め、さまざまな事例や資料を示すことで、具体的な構想を持つことができるように心がけた。

さらに、ティーチャーズコミュニティに毎時の授業の軌跡をアップし、初任者相互に板書やワークシート、自己評価カード等を学び合えるようにした。

#### 2 成 果

別紙1のチェックリストに基づき、授業の進歩・改善について分析してみる。

授業環境では、「子どもの実態把握や信頼関係構築、めあて提示、話す・聞くときのマナー、けじめある授業開始・終了」の項目は、4月当初はほぼ全員が“（どちらかといえば）できていない”状況であった。が、2月の学校訪問時のチェックでは、8学級すべて“（どちらかといえば）できている”の欄に当てはまった。毎訪問時、1人1人、チェック項目1つ1つに関して、出来るだけ具体的な方策を挙げるように努めた成果であると考えられる。

授業展開に関しての伸びは、視覚的な表示、個人思考、ペア・グループ学習など多様な学習活動、ワークシート、評価カードなど、個をとらえ伸ばす工夫に顕著であった。

机間指導や気になる子どもへの対応についても、2月には、80%以上が高評価となっている。

#### 3 課 題

- ・ チェックリストで、年間を通して最も評価が低かったのが、「子どもの発言やつぶやきをキャッチしている」という項目であった。かなり、子ども主体の授業になってきたものの、臨機応変な対応、子ども同士が言葉のキャッチボールを進めていくための教師の発問や切り返し等についての助言が十分でなかったと反省している。
- ・ 学校・学級の実態や教師の個性などによって、授業に関する成果と課題は異なる。2週間に1度の学校訪問では、参観する教科も限られ、課題克服まで至らなかった初任者もいる。次年度は、校内研修への寄与を進め、2年目となる本年度の初任者のさらなる授業力向上を見守る場にできればと考える。

月 日 ( )

学校名

授業者名

単元

1 授業環境		がんばって!	→	いいよ!	→	すごい!	アップ目標↑
人的環境	①子ども一人一人の実態（学習到達度、生活アセスメント等）を把握している。						
	②子どもとの信頼関係が築けている。（笑顔）						
	③わかりやすい説明・発問・指示ができています。						
	④（子どもが）話を聞くときや発表するときのルール・マナーが確立されている。						
物的環境	①授業に必要なもの以外は片付ける、整理整頓、掲示物など、教室環境を整えている。						
	②授業（学習）のめあてを明確に提示している。						
	③座席等授業形態を工夫している。						
	④規律とけじめのある授業開始、終了ができています。						
2 授業展開							
①（単元の）目標を考えて、学習内容を構成している。							
②子どもが興味関心をもつ教材（課題）を提示している。							
③視覚的な表示がある。							
④発問を工夫している。（一問一答にならない・学習場面の転換等）							
⑤個人思考、ペア学習、グループ学習など多様な学習活動を取り入れている。							
⑥ワークシートや評価カード（自己評価・友達同士の相互評価）など、個をとらえ、伸ばす工夫をしている。							
⑦机間指導が的確にできている。							
⑧子どもの発言やつぶやきをキャッチしながら授業を進めている。							
⑨子どもを適切にほめている。（すぐに・話し言葉や動作、表情など子どもに分かる形で）							
⑩子ども同士が（言葉の）キャッチボールをしている。							
⑪気になる子どもへの対応、支援が的確である。（ヒントカード、言葉かけ、待つ等）							
⑫板書を工夫している。							
⑬振り返り（まとめ）ができています。							
⑭子どもが「わかった」「できた」「楽しかった」という思いをもっている。							
3 その他							

## 4中学校の校内カンファレンスの成果と課題

プロジェクト教員（中学校担当）

細 田 能 成

### 1 校内カンファレンスに臨んで

私の担当は、中学校2校に派遣された初任者4名への指導・助言で、次の二点を主な目標に年間の校内カンファレンスを実施した。

- ① 専門教科の指導力を育てる
- ② 個や集団との望ましい関係構築力を育てる

本目標を達成するため、授業記録をもとに、授業の組立と展開の方法（導入段階としての学習活動、学び合う学習活動のあり方、評価とその活用など）、学習意欲を喚起する工夫（i P a dや実物投影機、習熟度別ワークシートなどの教材・教具の準備、学習内容と学習形態との関係など）、教師の関わり方（学習規律の確立、生徒との問答のあり方、指導困難な生徒への対応や机間巡視指導の視点など）等について分析と協議を継続した。

また、i P a dで撮影した授業風景の動画や授業チェックリストを通して、初任者自らが自己の授業を振り返り、前時の授業から改善された点や今後の課題点を自覚し、次時の授業にめあてを持ち臨めるようにした。

### 2 成 果

別紙2の授業チェックリストに基づき、教科指導力と生徒との関係構築力の向上について分析してみたい。

授業環境では、「生徒の実態把握、信頼関係の構築、わかりやすい説明・発問・指示」の3項目については、4月当初は全員が「できていない」状況であったが、10ヶ月が経過した2月時点においては、概ね「できている」となった。このことは、授業を支える具体的要素とは何かについて、授業参観の後に初任者と丁寧に協議を積み重ねてきた結果と考える。

授業展開に関する伸びについては、「興味・関心を持つ教材の提示、視覚的な表示、的確な机間指導、気になる生徒への的確な対応や支援、習熟度別ワークシートや相互評価カードの活用」など、個や集団をとらえ伸ばす工夫において顕著であった。

### 3 課 題

- ・ 授業チェックリストにおいて、年間を通して最も評価が低かったのは、「発問を工夫している、多様な学習活動に取り組んでいる」の項目であった。このことは、生徒が主体的・意欲的に学習活動を展開できるような指導・助言が十分でなかった結果と考える。
- ・ 初任者だけを対象にした校内カンファレンスではなく、若手教員やすばらしい教育実践に取り組む多くの教職員も出席する校内カンファレンスが実施できれば、初任者のみならず、若手教員の質の向上が図れるとともに、学校全体の活性化にもつながると考える。

1 授業環境		できていない	→	まざまざ	→	できている	アップ目標↑
人的環境	①生徒一人一人の実態（学習到達度、生活アセスメント等）を把握している。						
	②生徒との信頼関係が築けている。（笑顔）						
	③わかりやすい説明・発問・指示ができている。						
	④（生徒が）話を聞くとときや発表するときのルール・マナーが確立されている。						
物的環境	①授業に必要なもの以外は片付ける、整理整頓、掲示物など、教室環境を整えている。						
	②授業（学習）のめあてを明確に提示している。						
	③座席変えや班編成など授業形態を工夫している。						
	④規律とけじめのある授業開始、終了ができている。						
2 授業展開							
①（単元の）目標を考えて、学習内容を構成している。							
②生徒が興味・関心をもつ教材（課題）を提示している。							
③視覚的な表示がある。							
④発問を工夫している。（一問一答にならない・学習場面の転換等）							
⑤個人思考、ペア学習、グループ学習など多様な学習活動を取り入れている。							
⑥ワークシートや評価カード（自己評価・友達同士の相互評価）など、個をとらえ、伸ばす工夫をしている。							
⑦机間指導が的確にできている。							
⑧生徒の発言やつぶやきをキャッチしながら授業を進めている。							
⑨生徒を適切にほめている。（すぐに・話し言葉や動作、表情など生徒に分かる形で）							
⑩生徒同士が（言葉の）キャッチボールをしている。							
⑪気になる生徒への対応、支援が的確である。（ヒントカード、言葉かけ、待つ等）							
⑫板書を工夫している。							
⑬振り返り（まとめ）ができている。							
⑭生徒が「わかった」「できた」「楽しかった」という思いをもっている。							
3 その他							
①生徒の学びに広がりがある。							
②学習内容の定着を図る適切な家庭学習課題を与えている。							

## 5特別支援学校の校内カンファレンスの成果と課題

プロジェクト教員（特別支援学学校担当） 中谷 幸雄

### 1 はじめに

和歌山県立紀伊コスモス支援学校では、初任者高度化モデル事業校内体制を構築し、校内研究とコラボレーションすることにより、授業力の向上等、初任者の育成を図るとともに、学校全体のボトムアップを目指して取り組んでいる。小学部2名、中学部2名、高等部2名の計6名を担当する。成果と課題については、授業の記録等に基づいて述べる。

### 2 校内カンファレンスの内容

#### (1) プロジェクト教員による初任者の授業の参観と個別の振り返り

授業の分析にあたっては、同校作成の「コスモス授業チェックリスト」（別表3）を活用していただきながら、授業の進め方の工夫や改善について分析する。

#### (2) 同校独自の研修テーマを設定し、ワークのある6人合同のカンファレンス

本学の特別支援教育学の教員が専門分野のテーマに沿って、助言者として参画する。「アセスメント」「教材研究」「授業分析」等、内容ごとにゴール設定し研修を進める。

#### (3) 校内研究とのコラボレーション

昨年12月に開催した公開授業・公開研究会において、本モデル事業を取り上げて初任者によるポスター発表を行う。

### 3 成果

・「指導の意図の明確さ」の項目の中で、とりわけ「般化を考えた学習の内容を設定している」は、年度当初の「どちらかといえばできない」「どちらでもない」から「どちらかといえばできる」「できている」に概ね改善された。

・「子どもへの情報の伝え方と関わり方」の項目の中では、「指導したい内容を視覚化して伝えている」が、全員「どちらかといえばできる」「できている」である。その授業のスケジュールや内容について見て分かるように構造化ができた。

・「個に応じた指導の配慮」の項目では、「個々に応じたワークシートなどの活動や個別の学習が組み込まれている」が、全員「どちらかといえばできる」「できている」である。

・年度当初は、チームティーチングで授業を進める際、教員間の意思疎通が十分に図れていないと思われる授業も見受けられた。初任者自身も他の授業者とのコミュニケーションを積極的に図るよう努めた結果、その改善が図れた。

### 4 課題

・「個に応じた指導の配慮」の項目の中で、「ねらいのない待ち時間をへらし、学習の機会を保障している」の項目については、授業内容によっては、改善が必要と思われるものがあった。サブの先生の導線を整理することで改善される点はあると考える。

・行事等で参観できないこともあり、各初任者の参観総時数に差異が出てしまった。訪問可能日は曜日を問わず訪問し、参観時数の確保に努めることが必要となる。

# コスモス授業チェックリスト

「わかる」「学ぶ」楽しさのある授業！  
子どもとキャッチボールしながら創り上げる授業を目指して！

年 月 日 授業名:

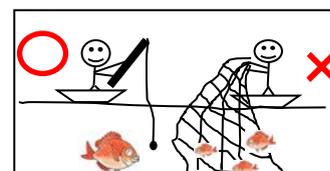
記入者:

1:できていない 2:どちらかといえぼできていない 3:どちらでもない 4:どちらかといえぼできている 5:できている ↑:アツツ計画

1 指導の意図の明確さ	1	2	3	4	5	↑
①授業のスケジュールが明確に提示されている。 (スケジュール全体と一つ一つの活動が分かる工夫も含めて)						
②指示は一度に一つにしている。						
③目標設定は具体的な行動をあらわす言葉で表記している。						
④般化を考えた学習内容を設定している。						
⑤主指導とサブの位置取りや活動の動線が整理されている。						
2 子どもの集中と理解を高める工夫	1	2	3	4	5	↑
①授業目標を子どもと一緒に確認している。 (個々の目標を生徒にも伝えている)						
②子どもの注意が向いたことを確認してから授業を展開している。						
③スケジュールや手順表等で、目標に対する確認や振り返りの活動がある。						
④どの感覚に働きかけているのかを意識し、指導している。 (五感・前庭覚※1・固有覚※2を含めて)						
⑤姿勢面への配慮をしている。 (見えやすさ・聞こえやすさ・操作しやすさ)						
3 子どもへの情報の伝え方と関わり方	1	2	3	4	5	↑
①指導したい内容を視覚化して伝えている。 (見て分かるように構造化し、操作を伴う活動があり、活動の結果が答えに導ける)						
②否定語・禁止語を使わず、肯定文で伝えている。						
③内容の理解や定着、頑張りを即時に評価し子どもに分かる形で返す機会がある。 (すぐに・話し言葉や動作・表情・視覚的に分かる方法で)						
④子どもの表出を待つ姿勢がある(せかさず・じっくり・さりげなく)。						
⑤他者評価だけではなく自己評価や友達同士の相互評価、多様な評価を組み入れている。						
4 個に応じた指導の配慮	1	2	3	4	5	↑
①全体授業の中で個々に応じたワークシートなどの活動や個別の学習も組み込まれている。						
②ねらいのない待ち時間をへらし、学習の機会を保障している。						
③生活年齢にふさわしい学習内容である。						
④子どもの言葉を拾い、やりとりしながら授業をすすめている。						
⑤考えがまとまりにくい子、話すのが苦手な子への支援の工夫がある。 (選択肢やキーワード、ヒントカードの提示)						
5 適切な実態把握と目標設定に基づく授業の展開	1	2	3	4	5	↑
①実態把握ができている。 (障害からくる困難さ・学習到達度などの把握だけでなく生活アセスメントを含む)						
②授業の中に「分かった」「できた」の体験がある。						
③子ども同士がキャッチボールし合える環境を作っている。 (ペア学習・グループ学習・発表・相互評価等の工夫)						
④子どもが話を聞く時や発表する時のルール等がある。						

※1前庭覚・・・内耳の前庭で知覚され加速(減速)や回転等、自分の頭の動きや傾きを感じ取る感覚。

※2固有覚・・・筋肉、腱、関節にある受容器から入力され、自分の身体がどう動いているのか、体位はどうなっているのかを知る感覚。



## 6 本事業の成果と課題

高度化モデル事業総括責任者 川本 治雄

2カ年の高度化モデル事業の実施によって、実施要項で示した6つの目標に向かって、平成25年度は取組を進めてきた。とくに「合同カンファレンス」「大学院での学びの接続」「校内での学びの深まりと広がり」について重点的に取り組んできた。

### ○合同カンファレンス

まず、合同カンファレンスは、自主的な意欲に基づく初任者研修の重点化による研修の効果を期待し、実践の振り返りの意義付けと学ぶ意欲の活性化に努力した。8月の合宿研修会も含んでの合同カンファレンスでの学びは「教えない」ことから「自ら課題を見つけ、コンサルテーションによる取組方向を模索し、決定することに力を注いだ。この経過については、毎回の初任者の振りかえりをエビデンスにして「初任高度化モデルタイムズ」(第Ⅱ部参照)が発行されている。

### ○コンサルテーション重視の課題研究への取組(大学院などの授業受講を通して)

次に、大学院授業を中心とし、各種研修会への参加をとおして各自の関心に基づく探究的な学びの姿の追求である。生涯を通して学び続ける教師としての力を蓄え、力量を向上させるために、生きて働く力となるよう進めてきた課題がある。この1年の成果として各自設定した「課題研究」への取組と大学教員を交えたコンサルテーションは、教職大学院での科目授業内容の高度化にもつながるものである。

### ○初任の研修の実質化と学校全体への波及効果

最後に、初任者研修モデル校における、初任の研修の実質化と学校全体への波及効果は、先導的な取組が現われ、初任者研修モデル校における校内研修・現職教育の活性化が図られつつある。具体的には、顕著な事例として、県立コスモス支援学校(和歌山県教育委員会所管)における初任を含む校内研修の充実に現われている。また、和歌山市立藤戸台小学校(和歌山市教育委員会所管)における専門を生かした教育活動の展開等が効果を上げている。また、岩出市立山崎北小学校(岩出市教育委員会所管)においては、初任者を含む若手の教員が自主的な校内サークル活動を展開し、校内での現職教育の新しい方向を提起している。

こうした取組の中で、次のような3つの特徴的な成果があがりつつある。第1に、自主的な意欲に基づく研修の重点化による研修の効果としては、初任者の育ち・学びに関して3月13日の成果発表会でまとめ、発信するという取り組みを進めている。(課題研究発表プログラムでの成果発表)第2に、初任者研修モデル校における波及効果として、大学教員・初任者研修モデル事業プロジェクト教員等によるモデル校への研修への関わりを通して、さらに学校での研修の高度化につながることを期待できることである。(和歌山市内小学校の事例や岩出市内小学校の事例)、第3に初任者研修の高度化(県教委の課題)や実践的カリキュラムの構築及び実施(大学の課題)等に見られる研修や教員養成の高度化への取組をあげることができる。

## お わ り に

高度化モデル事業総括責任者 川本治雄

本事業は、平成 25 年度及び 26 年度の 2 カ年に涉って実施する事業として企画したものである。平成 26 年度は、今年度の成果と課題の上に、新たな方向を見据えて取り組むことを企図している。まず、基本的な取組の方向性は変えないが、本年度の初任者は、来年度は本事業に参加しない場合は、和歌山県または和歌山市独自の計画に基づき二年次研修として数日の研修が課せられることになる。そこで、2 年次研修該当者の 18 名には、本事業の合同カンファレンスの指定した日を受講することによって学びの丘研修センターや和歌山市教育研究所の主催する研修を受講したものとみなす規程を追加することによって、初任者と二年次の教員が合同で振りかえりを行う新たな試みを進めていく計画である。

本事業は、国立大学法人の大学改革実行プランにもとづいてミッションの再定義が進む中、教員養成、工学、医学の 3 分野の改革の方向性が、各大学と文科省の協議により一昨年 12 月のヒアリング、昨年 7 月の 2 回目のヒアリングそして各大学ごとに公表という日程の中で、教員養成の高度化の一環として、全国的な注目を集めることとなった。(資料編参照)

次年度に向けて、取組の重点をどこに置くかということを検討する中で、教員養成の高度化・修士レベル化を見据え、教育学研究科長のもとに展開する意義を再認識したい。そして、①合同カンファレンスの重点課題にどう取り組むか、②校内での研修をどう活性化するか、③大学院の授業等とどうつなぎ、自ら設定した課題研究をどう探究するのかという 3 点を中心に効果的な研修・研究が展開できるようにすすめていきたい。

さらに、学部重点目標との関連を考え、それぞれの取組が独自性を持ちながら、他の取組との関連性・位置づけを明確にして本事業との有機的な連関を図っていきたい。特に、重点的に取り組んできた、和歌山県教育委員会との連携によるジョイント・カレッジの取組や和歌山市との連携による学校ボランティア活動、附属学校及び公立学校との協働研究、新事業としての藤戸台小学校をフィールドにした学部・大学院での理数系教員養成の高度化の取組などの総合的な位置づけを図ることは喫緊の課題である。

本事業につきまして、和歌山県教育委員会をはじめ和歌山市教育委員会、紀の川市教育委員会及び岩出市教育委員会、初任者を派遣して頂いている各学校のみなさん等多くの方々のご協力の下に推進させて頂いていることに深くお礼申し上げます。

2014 年（平成 26 年）3 月 13 日